



1.分かったこと

1-1 ID 理論の取り入れ (コンピテンシー)

gsis においてはカリキュラムの出口、アウトカムが明確に示されている。また、課程のアウトカム、人材像、コンピテンシーリストも制定され公開されている。フロリダ州立大学大学院をはじめとするコンピテンシー事例、および、コンピテンシー人物像と市場において求められる人材とのマッチング確認を行い、合わせて各科目間の整合性も検討されている。修了者像を明確化し、各科目の単位条件をコンピテンシーと直結させる方法はシンプルで分かりやすい。ID 理論における事前テスト、事後テストが想起される。gsis ではバックボーンである教育課程設計段階における質保証に ID 理論の考えが入っていることが分かった。

1-2 ID 理論の取り入れ (事前知識と科目間、科目ブロック内の関係性)

前提条件である知識が確実に身についた状態で、次の科目の学習に入れるよう科目間の関係性を重視している。ID 理論の前提テストが想起される。階層分析 (知的技能の課題分析法)、課題分析図画の考えが取り入れられていることが分かった。科目内においても教授システム設計研究演習にみられるように科目内のブロックごとにおいても関係性が重視されている。

1-3 ID 理論の取り入れ (各科目コンテンツ開発段階)

各科目を担当する教員が作成した授業用シラバスを道標として科目開発プロセス、概要設計、プロトタイプ開発、コンテンツ開発、レビュー、公開・運用、評価といった流れから、ID 理論における ADDIE モデルに代表されるシステムのアプローチが想起された。各科目コンテンツの開発段階における質保証にも ID 理論が取り入れられていることが分かった。

2.疑問に思ったこと

2-1 ID 理論を応用した e ラーニング成功事例について

gsis はこのペーパー (2007) 年から ID 理論を取り入れた高等教育実践の成功事例として紹介されている。高等教育は別としても、e ラーニングの成功事例のセミナー等ビジネスでは多く見聞きするが、実体 (実質的な効用) はないということなのか疑問に思った。

2-2 ARCS-V モデルについて

タスク 1 の参考情報 鈴木克明・根本淳子 (2011) 「教育設計についての三つの第一原理の

誕生をめぐって[解説] 教育システム情報学会誌、28(2)、168-176 で3つそれぞれの第一原理の解説があった。レイヤーモデルレベル3「学びたさ」(魅力の要件)、レベル2「学びやすさ」(学習効果の要件)にある達成指標例、主なID技法に当てはめていくと理解がしやすかった。ケラー第一原理の第5番目の原理として意志が加えられていることが記述されていた。ARCSモデルによる授業改善実践に興味があるので、ARCS-Vモデルについてどのようなペーパーがあるのか調べる必要を感じた。

3.調査結果

3-1 ID理論を応用したeラーニング成功事例について

優秀なeラーニング開発者に贈られる日本e-Learning大賞を知った。2015年度で第12回を迎えるようであるhttp://www.elearningawards.jp/pdf/spinoff_20150724.pdf 第1回はNTTレゾナント[株]eラーニング講座「貿易実務オンライン講座(基礎編・応用編)」と民間企業であったが、第3回は九州大学医学部 保健学科看護学専攻 看護学教育におけるIT教材の開発と活用・「間違い探し」から「お手本型」による看護技術教材、第4回大阪府立大学 看護学部 看護実践能力を支援するeラーニング実践-メタ認知を促すMyデジタル看護辞典等、毎回いくつかの高等教育機関がなんらかの受賞している。わが国においても2000年以降eラーニングが注目され始めたことがきっかけでID理論の普及が始まったことが、放送大学印刷教材「人間情報科学とeラーニング」(鈴木、2006)で指摘されていることから、上記事例にも何らかのID理論は取り入れられている可能性はあるが、授業内のある部分であったり、課程の1部分でありgsisのように研究科全体に取り入れられているタイトルはなかった。経産大臣賞、文化大臣賞など過去14回分を見ても、成功事例とされる授業の継続性、その後の改善といった点や質保証といった側面よりも、目新しさに評価基準があることが分かった。

3-2 ARCS-Vモデルについて

ARCS-Vモデルに関する教育実践研究数は少ないことが分かった。組織理論における期待理論ではモチベーション、業績、満足感のサイクルがひとつのシンプルな流れであるに対し、MVPモデル概念図では「外からの入力」、「心理的環境」、「出力」といった3つの流れで構成されているため複雑になっている。価値、期待感とモチベーション、モチベーションと意志、意志とパフォーマンス、成績などの結末と満足感、満足感が価値に与える影響など一部の心理的環境と出力を中心とした教育実践研究は可能と考えた。また、中寫先生がVモデル下位分類に試み、ケラーとの違いを明確にしながら教育実践研究に取り組んでいることも分かった。

※鈴木克明(2010.7)「ARCSモデルからARCS-Vモデルへの拡張」第17回日本教育メディア学会年次発表論文集,115-116

http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~idportal/wp-content/uploads/jaems2010_suzuki.pdf

f

※中畠康二・中野裕司・渡辺あや・鈴木克明（2013.5.18）「拡張版 ARCS 動機づけモデルの実践有効性検証ツールの設計と評価」日本教育工学会研究報告集(JSET13-2), 147-154

<http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~idportal/wp-content/uploads/%E4%B8%AD%E5%B6%8CJSET13-2%E9%95%B7%E5%B4%8E.pdf>

※中畠康二・中野裕司・渡辺あや・鈴木克明「MVP モデルの拡張に基づく ARCS-V モデルの V 要素下位分類の提案」日本教育工学会第 28 回全国大会 2012 年 9 月

<http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~idportal/wp-content/uploads/jset2012nakajima261-262.pdf>

以上